

春宵弓張月

前編

三

第五号

^ 13
3692
3



門へ13
號 3692
卷 3

曲亭翁原稿

西馬老人綴

及
滿
月

東京書房

文昇堂熊谷梓

五編壹

卷之見
 其文章早と縮加画
 鏡昇堂梓
 増敷 例の袋入草紙と發行せむ処あり 初編の配るる殊の外御慰ふ
 視輕 例の袋入草紙と發行せむ処あり 御催促あり書賈始統りかく是全く武勇れ
 英名萬世のや八郎大明神の御利益と感涙肝ふり下 既一編三編追出板に及び
 此度差出の四五は巻、御曹子大鳴より八丈へ涉り給條亦有之とて早急四のま
 八編追来秋中相違なく賣出、画工彫師出情仕尤著述、四十年比昔とあれど又新
 く櫻木の咲せる花の八重以路おもま三十五年月は御神縁時代後り御方八咄不知やまら
 ぬ心の心づきの離より年経る後れぬ逢美心も深き為朝が愛ふ妹背の再會を契る趣
 向、翁の著意とく終るま、古今は奇書尾龍と氣障とがあれ、讀み自れ心潔く御名を
 門戸も張おけ、疮瘡麻疹と除くとゆら此草紙の満尾迄、いづ度々尊名を唱えられ、
 この双糸城一度完る筆、悪事災難と手のまてく福壽延命と授受給るとの御神慮
 あり紙板見能、裏手摺、此店より出まは、四輯讀んで五編の求られませう

嘉永四辛卯年 初夏
 樂亭西馬恐謹述

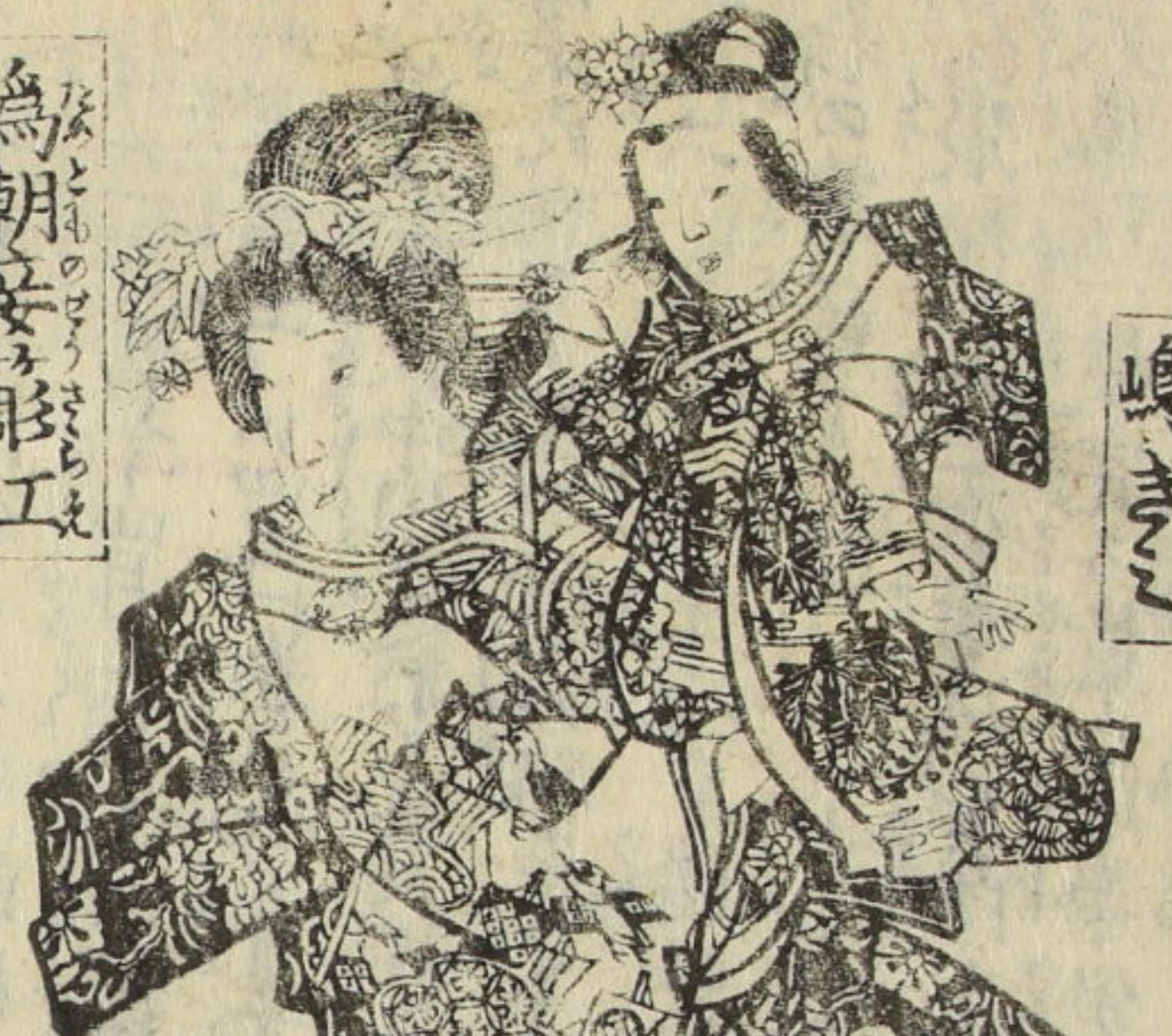
男嶋鬼夜又



頼

為朝妾江

折れも地引乃
いのの屋室
梅翁



鳴き

為九改嶋冠者為頼



朝雅

三張片五緒

吉



御曹子為朝

三郎大夫忠重

御曹子為朝
知恵此海河乃 夫福也
此よりくもあはれ
まきしと



山猫の怪

鬼夜叉娘長如

斬つては梅のむき乃
あねあも花てと
欲とあはれはあ
楽と



鳥朝

鳥朝

朝

鳥九



鳥朝

忠重

西馬抄圖畫

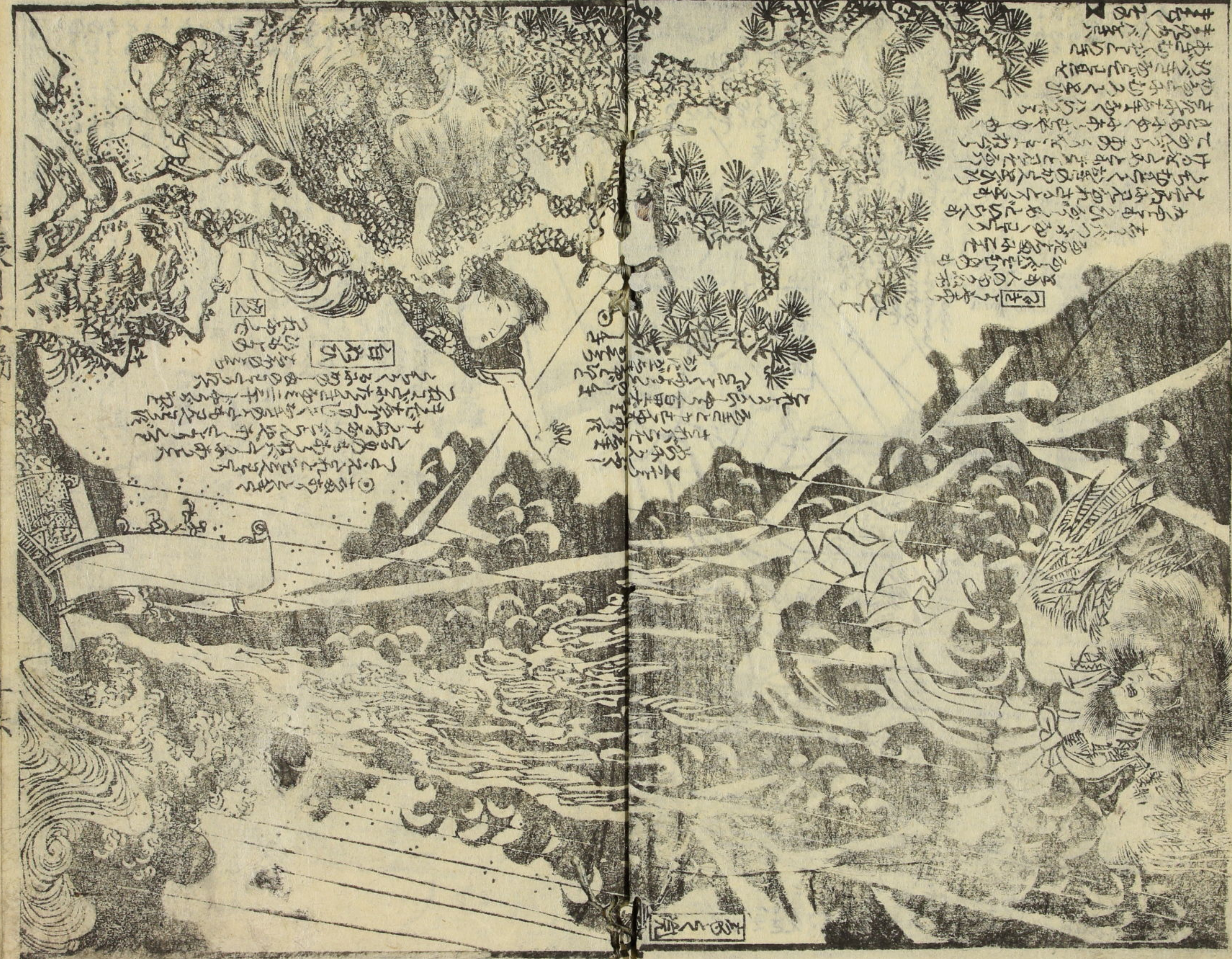
三張五紙



細平次



白ゆり



四

井ノ原の松
井ノ原の松は
古くは神代松
といはれしなり
其の葉は冬も
枯れず夏も
青く常緑の
木なり其の
幹は直く
上は曲りて
雲を穿つ
如く其の
影は長し
其の葉は
細く針の
如く其の
色は緑
なり其の
香は清
く其の
実は大
きく其の
味は甘
く其の
用は多
く其の
名は古
く其の
説は
多し

白雲
白雲は
天の
衣なり
其の
色は
白く
其の
形は
雲の
如く
其の
動は
風
の
如く
其の
静は
水
の
如く
其の
大は
天
の
如く
其の
小は
水
の
如く
其の
多は
天
の
如く
其の
少は
水
の
如く
其の
美は
天
の
如く
其の
悪は
水
の
如く
其の
善は
天
の
如く
其の
悪は
水
の
如く
其の
善は
天
の
如く

松の
葉は
針の
如く
其の
色は
緑
なり
其の
香は
清
く
其の
実は大
きく
其の
味は
甘
く
其の
用は多
く
其の
名は古
く
其の
説は
多し

松の

井ノ原の松

井ノ原の松



ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち
ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち
ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち

あつちのえちりり
とくへんまはさつち
ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち
ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち

あつちのえちりり
とくへんまはさつち
ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち
ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち

あつちのえちりり
とくへんまはさつち
ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち
ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち

あつちのえちりり
とくへんまはさつち
ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち
ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち

あつちのえちりり
とくへんまはさつち
ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち
ひつりあつてさき
まはさつちのえちりり
とくへんまはさつち

牙張片五條

廿五

為朝



為朝 國輝画圖 西馬鈔譯

為朝物語、保元平治盛衰記と始り、あまの書見載、こゝにのく、伊豆の
大島へ配流せしと限、此弓張月と其大既と素うして、鎮西に生立ると
後諸嶋と巡り、琉球へ渡り、事次補綴られ、全く著作堂の物の妙ありて
又珍しき奇談おれ、能行とて、早余年、今猶慶長に、まると書見舞の勝る
是に画圖と増文と略して、去年より梓行あり、既小當夏五の巻、小至に
夏小車ひ八郎大明神乃御開扉ありと、諸願利益の蔭にや、納京、益寝と
人の氣も、草紙小核ら、暑に、裏中新板、ま、出ぬ、ト御催促と重陽、汁、頂
は、軒の燈籠や、祇園會の、え、ち、ん、懸、陽氣、は、端居、む、の、離子、の、馬鹿、小、早、の、と
仰も、お、常、に、倍、せ、配、り、れ、部、敷、の、の、刺、ち、ち、と、來、地、中、板、元、頓、り、六、七、の、春、地
免、夏、獅子、の、ま、り、の、遠、音、と、聞、み、ら、う、と、内、小、居、兼、る、重、推、れ、さ、ら、く、小、等、く、一、て、
極、暑、も、厭、ら、ず、走、廻、り、彫、師、画、二、附、車、に、逃、脱、思、案、の、僕、も、土、用、掃、の、手、傳、と、意、あ、
毫、の、採、配、札、乃、疊、汗、と、拭、く、さ、ら、く、身、と、二、帖、補、誌、あ、る、事、と、う、程、

乃長六

夷福庵西馬迹





七郎三郎
鬼夜叉

為朝

海乃達と
たつねと

名との



瘡瘡鬼
御曹子の
武勇小怕

鎮西

八丈島
あり公の御名

ある地へ
末世立ち
と誓詞と

朝

為朝



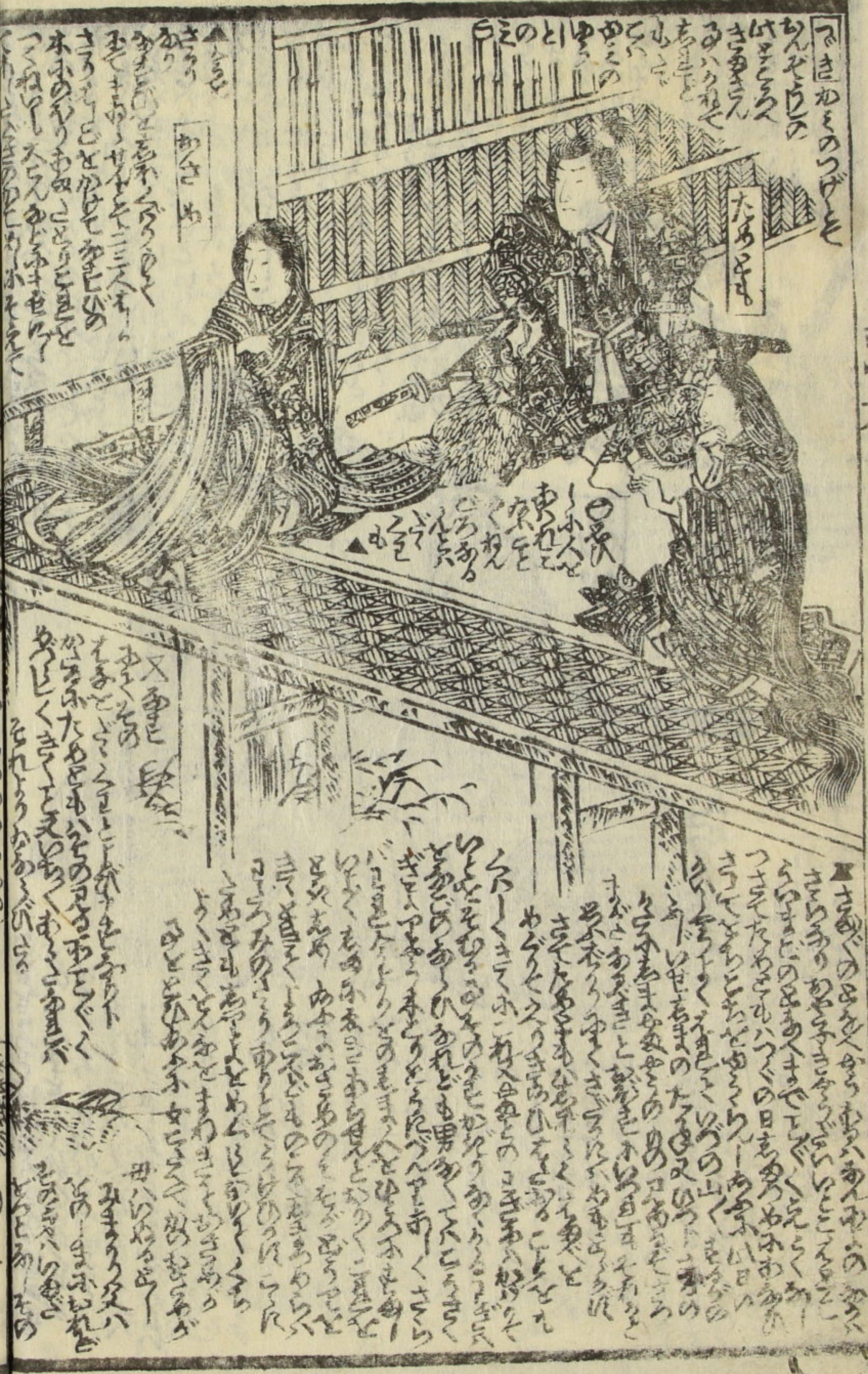
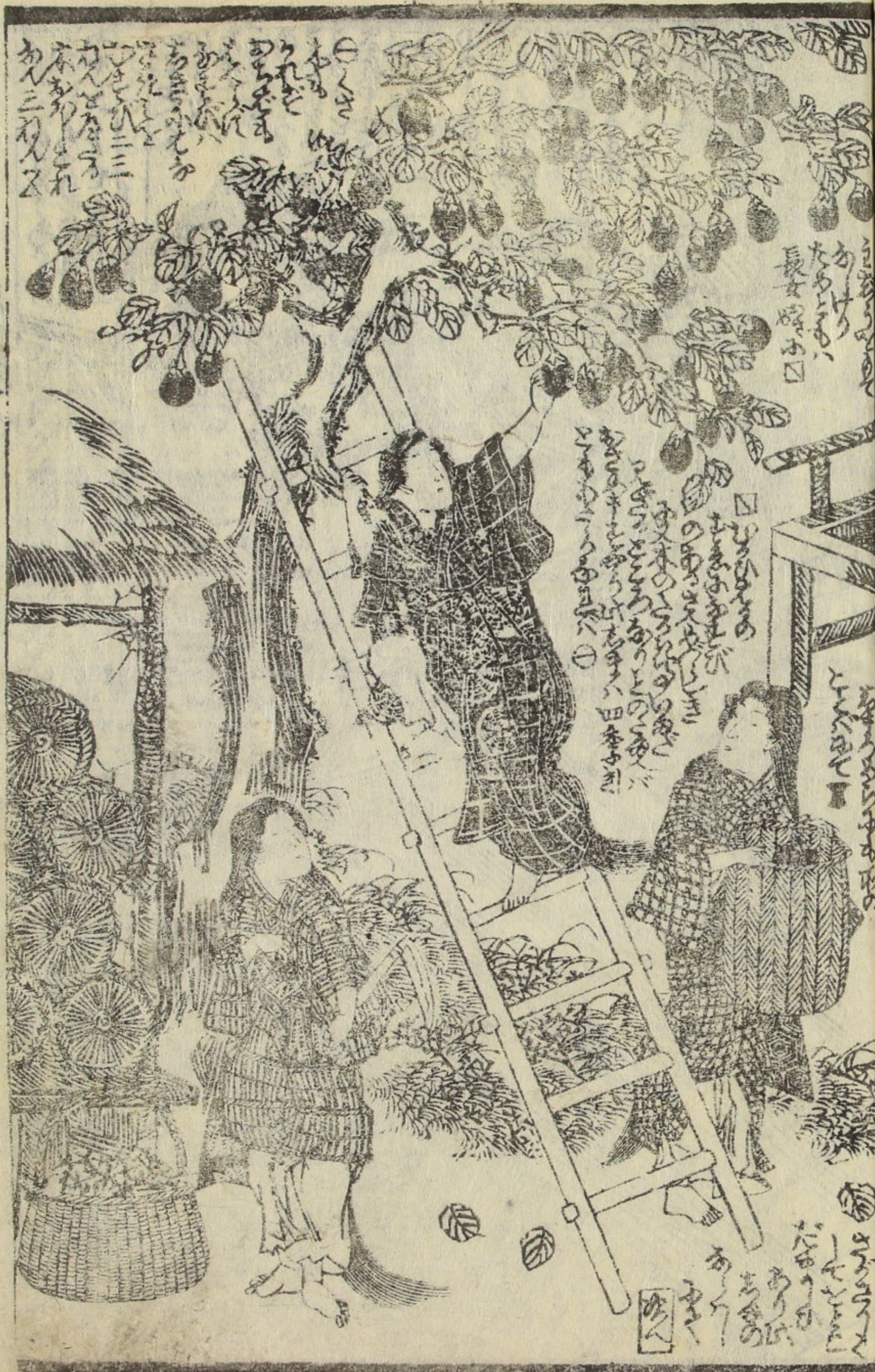
時 能
 深田 郎
 足利義康が
 近臣
 大嶋の
 三郎 忠重
 十代
 欲ゆ
 いたるなり



鳥朝の三男朝雅
 足利義康の養子とあり
 後小足利太郎
 義包と名乗
 乃ほ
 頃
 くもれ
 あどのお
 とき
 乃ほ

鳥朝の
 側室
 江

弓張六





甲斐守

七

Handwritten text in the upper right corner, likely a chapter or section header.

Handwritten text in the middle right section, continuing the narrative.

Large block of handwritten text on the right page, spanning the middle and lower sections.



七郎三郎

Handwritten text in the upper left corner, possibly a chapter or section header.

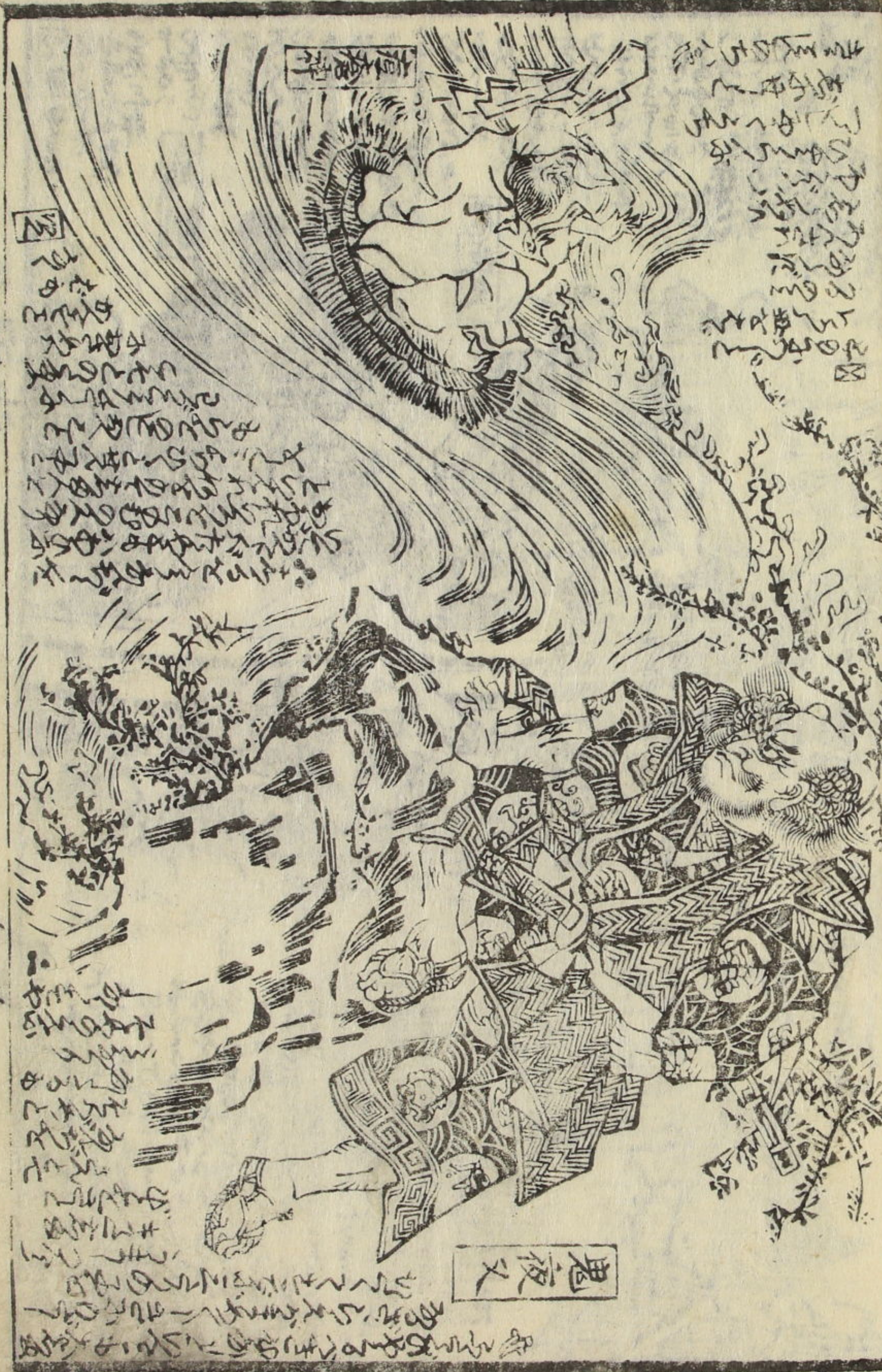
Handwritten text in the lower left corner, likely a concluding note or signature.



狐

狐の尾は
 長く
 毛が
 濃く
 黒い
 色
 の
 毛
 だ
 り
 と
 言
 へ
 る
 狐
 の
 尾
 は
 長
 く
 毛
 が
 濃
 く
 黒
 い
 色
 の
 毛
 だ
 り
 と
 言
 へ
 る

狐の尾は
 長く
 毛が
 濃く
 黒い
 色
 の
 毛
 だ
 り
 と
 言
 へ
 る
 狐
 の
 尾
 は
 長
 く
 毛
 が
 濃
 く
 黒
 い
 色
 の
 毛
 だ
 り
 と
 言
 へ
 る



鬼夜叉

鬼夜叉は
 水
 の
 中
 に
 現
 れ
 る
 鬼
 の
 身
 だ
 り
 と
 言
 へ
 る
 鬼
 夜
 叉
 は
 水
 の
 中
 に
 現
 れ
 る
 鬼
 の
 身
 だ
 り
 と
 言
 へ
 る

鬼夜叉は
 水
 の
 中
 に
 現
 れ
 る
 鬼
 の
 身
 だ
 り
 と
 言
 へ
 る
 鬼
 夜
 叉
 は
 水
 の
 中
 に
 現
 れ
 る
 鬼
 の
 身
 だ
 り
 と
 言
 へ
 る



りていへん...
 不...
 朝雅

鳥丸
 朝雅
 鳥丸

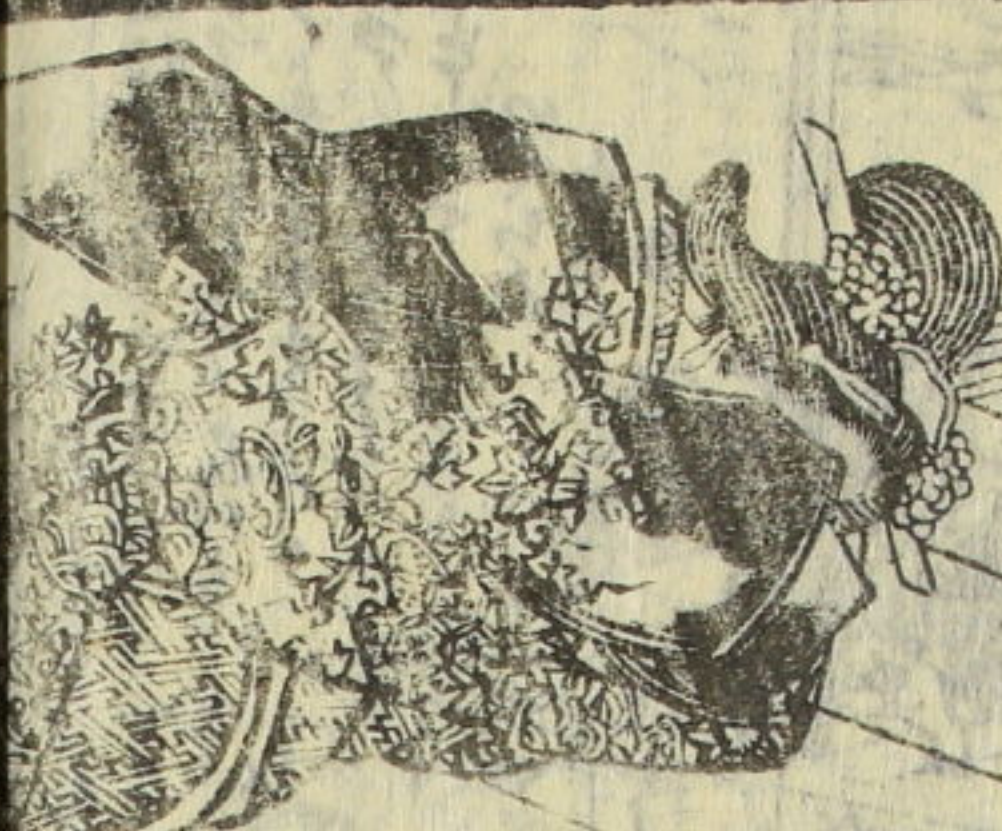


鳥丸
 鬼夜又
 鳥丸

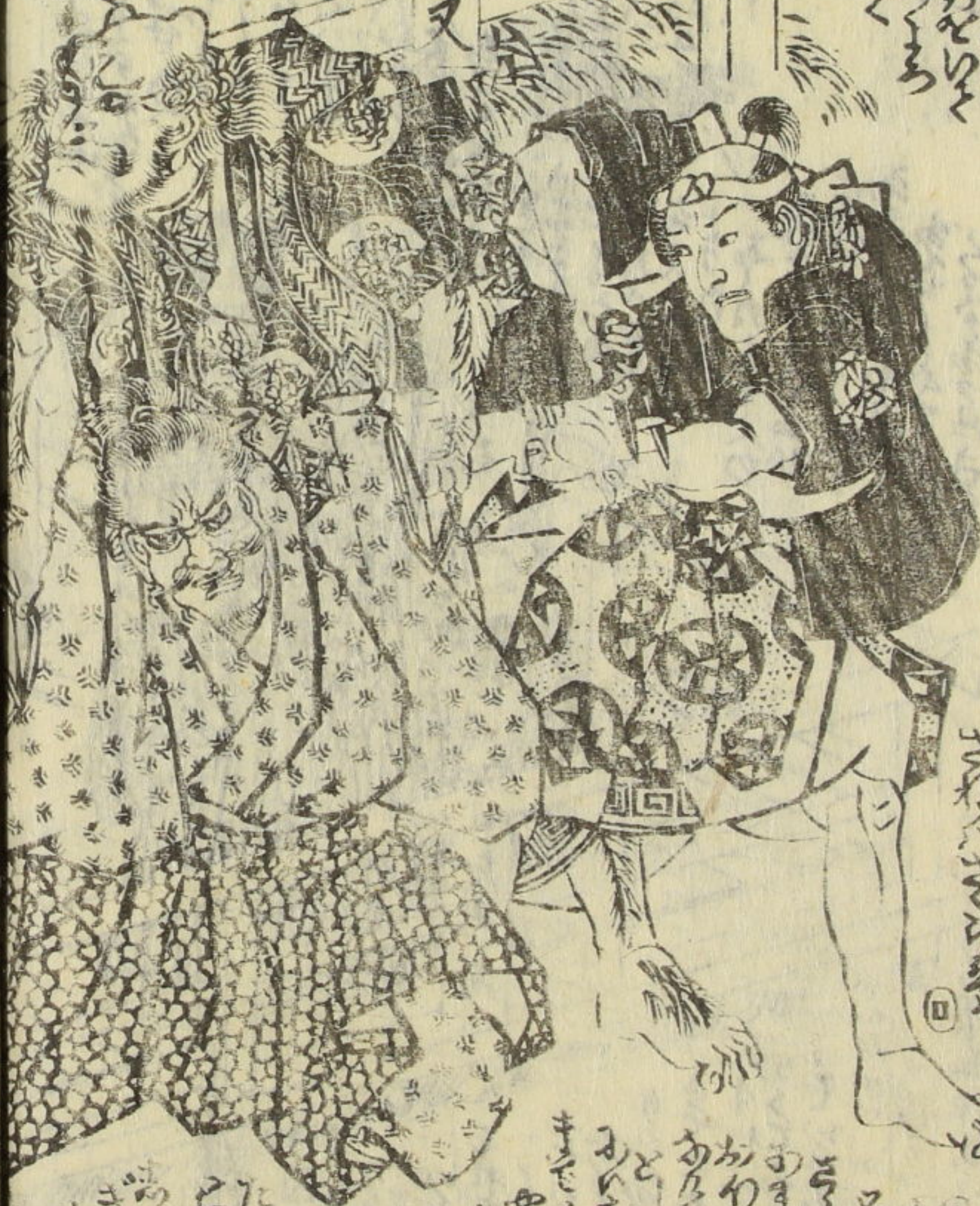
鳥丸
 鳥丸
 鳥丸

不吉 小前様も多分とらしたるもど大い
 ちまの如きと見ゆればねばいふ事
 みづらのまゝに人なれどもあはれ
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは

まら元

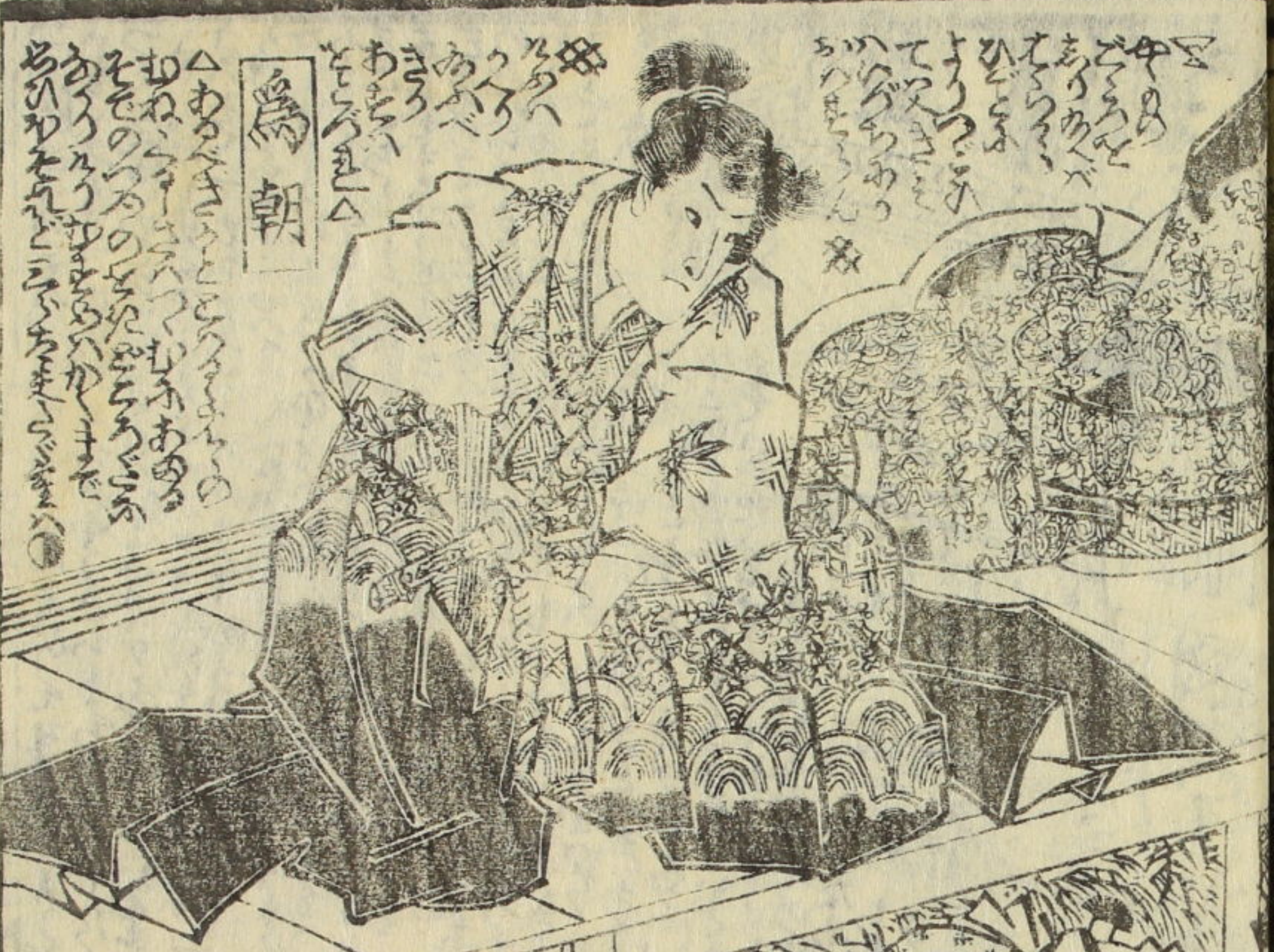


鬼夜叉



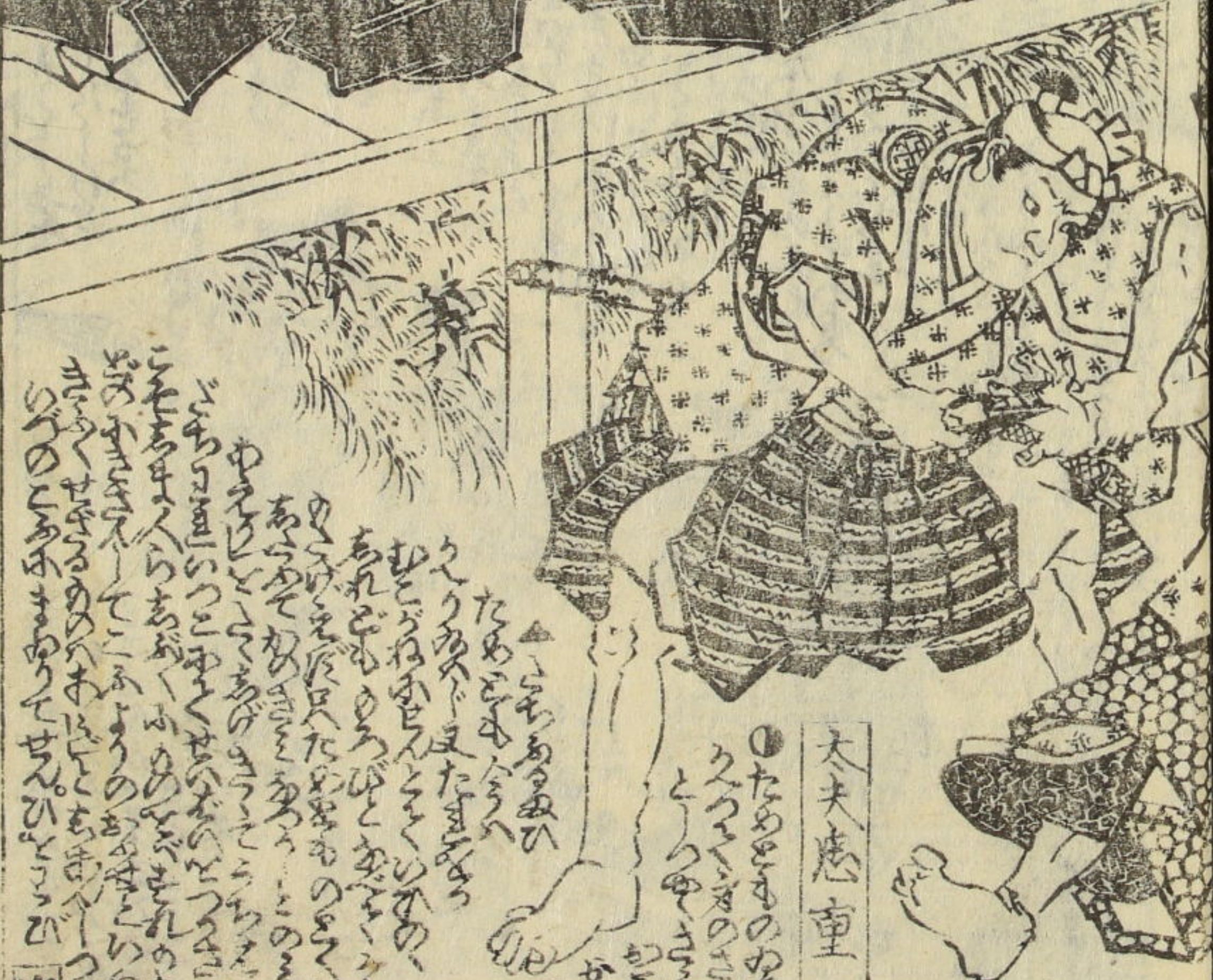
「あやうしめしき事なり」ニカ
 小前様も多分とらしたるもど大い
 ちまの如きと見ゆればねばいふ事
 みづらのまゝに人なれどもあはれ
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは

あやうしめしき事なり
 小前様も多分とらしたるもど大い
 ちまの如きと見ゆればねばいふ事
 みづらのまゝに人なれどもあはれ
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは



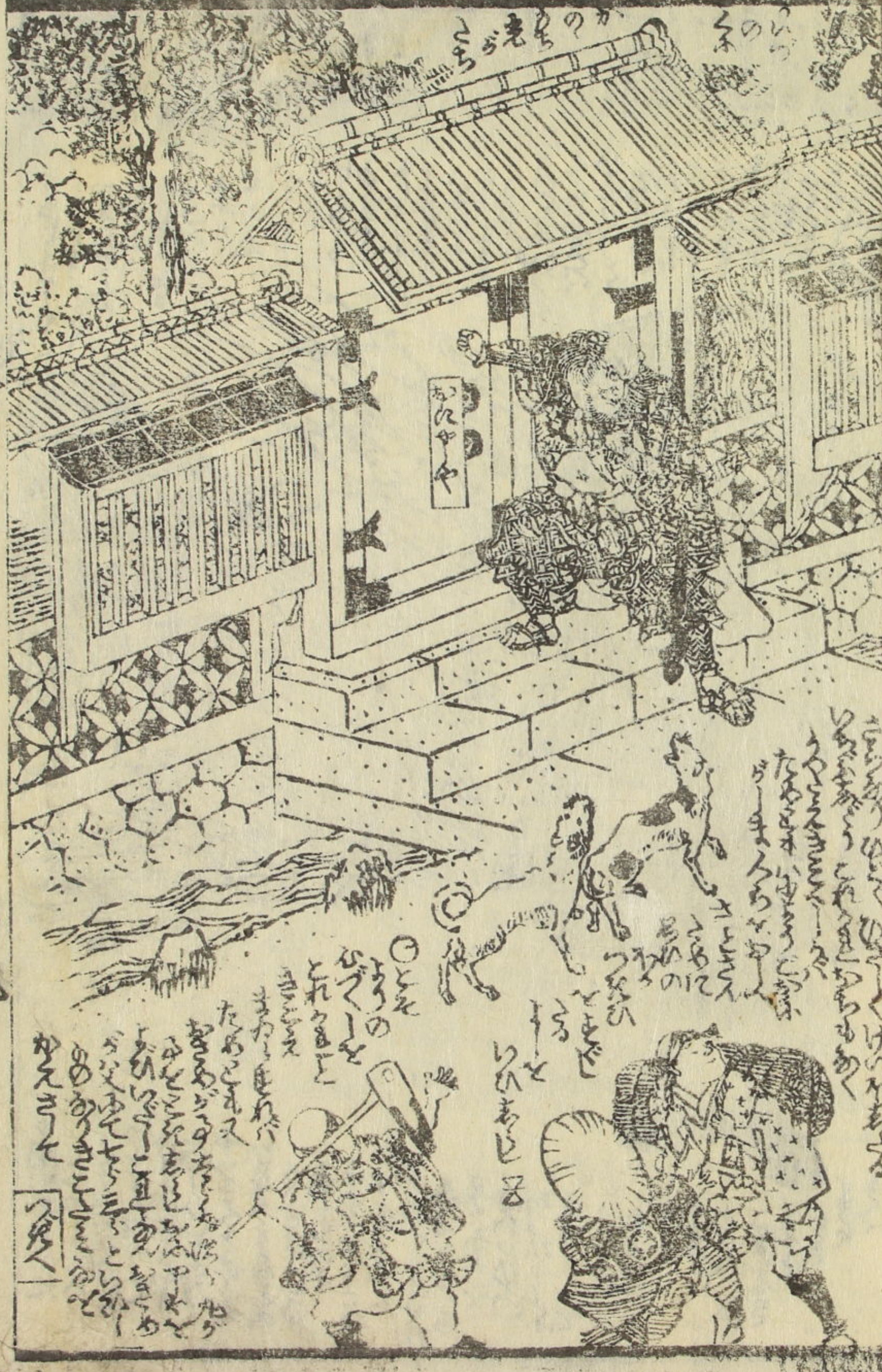
鳥朝

△あやうしめしき事なり
 小前様も多分とらしたるもど大い
 ちまの如きと見ゆればねばいふ事
 みづらのまゝに人なれどもあはれ
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは



大夫志重

「あやうしめしき事なり」ニカ
 小前様も多分とらしたるもど大い
 ちまの如きと見ゆればねばいふ事
 みづらのまゝに人なれどもあはれ
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは
 あかすらういさくなどいふは



かみまの
のい

かみま

かみまの
のい

かみまの
のい

かみま



かみまの
のい

かみまの
のい

かみまの
のい

かみま

かみま

